

補習授業校だより 年度末の評価と通知表について

年度末を迎えるにあたり、補習授業校における「評価」と「通知表」について申し述べます。

国内の子ども達でしたら、どんな「通知表」をいただけるのか気にかかるところですが、本校の「通知表」は、本日、子ども達自身が半書きしました。これを担任が見、評言を書き添えて、来週、本人に渡すという運びです。こう申しますと、どんな内容や形式なのか気にかかることになりそうですが、実物は、来週ご覧いただくこととして、ここでは、作成にあたって考慮した次の三点について申し述べたいと思います。なお、先週の朝礼で子ども達にも骨子を話しました。

補習授業校に合った「通知表」にする。
国内の動きに応じた「通知表」にする。
今後への指針となる「通知表」にする。

補習授業校の児童生徒は、渡航年齢及び在留期間が個々に違います。このことは、国語学習に対するレディネス（準備状態）が、人工的な要因によって異なっていることを意味します。したがって、学習目標も別個であるはずですから、形式のみ国内校に倣って、子ども達に与える教育的効果は疑問です。しかし、評価そのものはこれまでの学習を振り返り、今後の課題を明確にするために必要です。要は補習授業校に即したものにすること、評価項目も日頃の指導事項を掲げることになります。

例えば、一週一回の授業を充実したものにするには、週日の家庭学習を地道に積み上げなければなりませんから、「宿題」は必須のもの。また、本校では基礎基本の学習という補習授業校の使命を果たす具体的な方法として、「音読」を奨励し、CDやテープも利用しながら指導に力を入れてきましたので、これについても評価したいと思います。さらに、時間的・物理的に不自由な条件下で学習目標を達成するには、お互いに協力し、刺激し合う授業をめざすことが大事であることを何度か述べていますので、授業中の私語や他人に迷惑をかけなかったかどうかもあらためて確認しなければなりません。

国内では、平成元年に「学習指導要領」が改訂されたのに伴って、「指導要録」（教育評価の規準であり、学校に残す記録簿）も平

成四年度から改められました。その中で最も大きく変化しているのが学力のとらえ方です。これまでは、結果としての知識の量や理解の程度を問うてきたのですが、今回の改訂では、主体的に判断し行動するために必要な資質や、能力として身に付けた学力を問おうとしています。これが「新しい学力観」といわれるもので、観点別学習状況の観点の順序が「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」にあらためられています。補習授業校は国内法に拘束されませんが、子ども達の帰国後の接続をスムーズに進めるため、この点についても改訂の趣旨を汲むようにしました。

冒頭に「どんな「通知表」か気にかかる」と述べましたが、一般的な方式、つまり、「天の声型」あるいは「判決言い渡し型」では、気にしながらもじつと宣告を待つばかりありません。そして、意外と良かったために反省しきりだった勉強ぶりまで認められたように思ったり、反対に相当頑張ったのに全く認められず、その科目まで嫌いになったりという例がよくあります。

いずれにしても、経過を振り返ることもなければ、今後の方向性も示されない総括というのは、子ども達にとつて生産的ではありません。「通知表」を「ゴールにおけるもの」ととらえるのではなく、新たなスタートにおいて子ども達の指針になるものにしたいたいと思うのです。それには、まず、子ども達自身にこれまでを振り返らせることが必要です。そこに教師が助言・注意・激励を書き添えれば、現時点での課題が本人と家庭とに明らかになるはずで、これは「通知表の見方」についてお願いでもあります。

なお、本校としては写しを保管し、児童生徒理解のために利用することを申し添えます。

（注）現在の「指導要録」は、平成十年に改訂された平成十四年度から改められた新しい「学習指導要領」に基づき改訂されています。

その内容は、従前「観点別学習状況」を基本として絶対評価の色合いを濃くし、相対評価としての「評定」は「観点別学習状況」の補足としていたのを、相対評価から絶対評価へと完全に移行したものです。

今回の改訂は、基礎的基本的な内容の確実な定着を図り、自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」の育成をめざしており、「通知表」もこれらを反映させなければならぬこととなりますが、このことは、従来から使用している本「通知表」において、既に反映されています。